

1953年9月26日、発表論文「精神分析におけるパロールと言語の機能と場<sup>1)</sup>」の序論として発表された。

「わが友人たちよ」、このことばでラカン博士は、みずから友情のしるしのもとに置いた会議の聴衆に呼びかける<sup>2)</sup>。それは、迎え入れられるわれわれにとって「自分はツーリストでも侵略者でもなく、あまり粗野な外国人だと感じることなく、街の空気を吸える客人」であるための保証となる、ローマの同僚たちの友情であり、自分たちの意識を新しい契約で基礎づけたばかりの人たちの、この盛大な会議の団結を支える友情である。そして演者がここで強調したいのは、新しい運動への参加者の間を支配する若さがこの運動の将来の約束を表すとすれば、この集合の場所へのほとんど全員の出席にうかがえる努力と犠牲は、すでにその成功の輪郭を示すものだというのである。分析によって獲得された人間的関心の感情によってここに導かれたすべての人たちは、それゆえにこの友情に加わっていただきたい。

配布された報告は確かに話し言葉で書かれているが、実際に発表して再現するには長すぎるので、演者は聴衆がすでにそれを読むことができたと信頼して、自分の講演の意味を明確にするだけにとどめた。

演者の指摘によると、この日彼がとりあげるものは、少なくともフランスでは分析運動が散発的だったと思えるほぼ25年をとおして、さまざまな困難、さらに、時には指導もあったが多くの場合なんの手がかりもない経験の彷徨をへて、少しずつ獲得されていった考察の成果だったのだが、- 戦争以来、一丸の努力をもって集結したすべての人々に彼は「ずっと以前から」敬意を抱いており、このような努力の共通の利益は個々のものに優先すべきだと思えたのだ。「ずっと以前から」というのはもちろん、分析の諸概念とそれらの公式化を把握

- 1 -

することができるようになってからということの意味する。なぜなら、この教育者の役割をとおして演者がこの成果に至るには、戦後の若者たちが分析の源泉に訴えようとする熱心さ、そして彼らが出す知の要請のすばらしい圧力があるだけで充分だったので、彼らがいなければ自分は常にこの役割に値しないと感じていたのだ。

このように、演者が本質的な問いに与えようとする返答を、結局、それを彼に出した若者たち自身が聞くと言うことは正しいことである。

なぜなら、一つの問いは、ほとんどの場合相手を困らしたくないという曖昧な感情から対話の一方によって避けられたとしても、やはりすべての精神分析教育に本質的に生きており、技術的養成の価値が測られるさまざまな問いかけのおどおどした姿のなかに露呈するのである。「先生（これは暗に、転移とか抵抗という隠れた現実のことをご存じの先生、ということの意味する）、何をすればよいでしょう、どう言えばよいでしょう（先生は何をするのか、先生はどう言うのか？という意味）このような場合に？」というわけである。

教師へのこの依存はあまりにも無防備で、医学的伝統を凌駕しており、科学の持つ近代的口調には無縁に見えるほどであるが、それは、この依存が関係する対象そのものについての深刻な疑念を隠している。不作法であることを気にしない学生なら、彼が言いたいのは、「何が問題になっているのだろう」ということであろう。「一人がしゃべりもう一人が聞く二人の人間のあいだで実際的な何が起こりうるのだろう？見ることも触れることもできずかくも捉えがたい行動なのに、この行動はどのように自分が想定しているような深みに達することができるのだろう？」

この問題は軽い問題ではないので、分析家がそこに立ち戻ってくるまで - それも時には未熟なままで - 彼につきまといわすにはいられないし、また彼はこの問題に見合った者であろうとして、精神分析における非合理的なものの、または概念的に同じ手合いの、他のあらゆるお粗末なものの機能について思弁を働かさないうけにはいれないのだ。

- 2 -

事態が改善することを待つなかで、新参者は自分の経験がつねに幻影として消え去りそうな不安定な宙ぶり状態のなかで成立しているように感じ、おのれを苦しめることになるあの常軌を逸した実<sup>objectivation</sup>体化の明日を用意するのだ。

というのも、通常、個人的に精神分析を受けたところで他の人よりも容易に自分自身の行動についての形而上学ができるわけではないし、それをしないことの危険を減らすものでもないからである（このことが意味するのは、もちろん、知らず知らずにそれをするということである）。

いや、まったく反対なのだ。それを理解するには、一つの経験のなかで、分析家に何がパロールを充溢させるかを考えるように要求して、彼をパロールの作用に直面させるしかない。この経験とは、そこにおいて、他のすべての実現方法を遠ざけることによって、パロールはそこでは少なくとも重要に違いないということが垣間見られ、そしておそらく確認されるものである。

パロールの作用は人間を自らの正統性の上に立脚させるということにおいてパロールの作用から出発すること、もしくは四番目の福音書の「初めに<言葉>ありき」という絶対的起源の措定のなかでパロールの作用を捉えること - この<言葉>の作用は行動と重なり、日々自らの創造を新しくするのであるから、ファウストの「初めに行動ありき」はそれに反対することはできない - 、これらの道はどちらも想像的な疎外における他我 [alter ego] の現象学を越えて、<一者>がまだ不在であるとき、二番目ではない<他者>の媒介の問題に直接向かうことである。それは、ここではまさに語源的ともいえる審級に置かれた責<sup>responsabilité</sup>任<sup>13</sup>の試練が生みだすだろう無意識でしようとする欲求を、このような接近の諸困難によってはかることである。そして同時に、この点でパロールの影響がスペクトル分析的分解により厳密に適用されなかったとしても、それは、実践家に自分の「良識」の虚偽の中でのいっそう頑固なアリバイと、彼にあらゆる資質の可能性が与えられているなら、彼の卓越性と呼べるものにふさわしいかたちで自らの使命を拒否することとをさらに可能にするためでしかなかった、と説明する

- 3 -

ことである。

そのうえ、アリバイと拒否は実践家の活動における労働者の様相を呈するのだ。言語をパロールの作用における単なる手段としてしか取らない場合、言語をもっとも一般的に特徴づける耳を聳するうなりが、パロールが前提とする真理の審級の前で言語を拒む役目を果たすのである。だがこの審級は遠く離れて置かれてのみ引き合いに出されるのであって、それも問題の明白な事実をごまかすためである。明白な事実とはつまり、言語において素材の本質的な役割は言語を思考の分泌物に還元することを否定するし、言語的伝達の過去と現在の支持物がはかられる何トン、何キロメートルもの量の大衆による確認は、言語が現実界で構成する間隙の次元について問いただすに十分だということである。

なぜならこのことによって、パロールの作用は単に主体にとって自らを表現したり主張したりするだけではなく、自らを承認させるということであるという限りで、分析家は自分がパロールの作用に参加する部分に送り戻されるとは思わないからである。おそらくこの操作には厳しい要請<sup>exigences</sup>がないわけではないだろうし、要請がなければそれほど長くは続かないであろう。いやむしろ、分析の効果がうまれるのは、この操作がいったん始まってから展開される要請によるのである。

解釈の機能に随伴し、そして、現実界と現実界に与えられた意味との間で解釈が前提とする距離についてしっかりと強調されるべきであろう時に、分析家に解釈を曖昧にしておかせる魔術的なものは - そして文字どおり分析家の実践を包む良心の非難と原則的な畏敬は - 、解釈の基礎となる根本的な間主体的関係についての省察を塞いでしまうのだ。

とはいえ、分析実践が開示する有効性の諸条件ほど間主体的関係をよく表明するものはない。というのも、実践がなす意味の開示が必要とするのは、主体にそれを聞く準備がすでにあるということ、つまり主体がそれをすでに見いだしていなければ、それを期待していなかったであろうということである。だが、もしその理解に分

- 4 -

析家である皆さんのパロールの反響が必要だとすると、すでに分析家に向けられることによって分析家のものであったパロールのなかでこそ、主体がそこから受けとるべきメッセージが成立したのではないだろうか。このように、パロールの行為は、コミュニケーションというより、本質的な告知における諸主体の基盤としてとして現れるのである。これは、分析家を自らの行動のあの至高の点において動揺させる両義性のなかに完全に認めることができる創設の行為であり、この行為のためにわれわれは先に責任の語源的意味を呼び起こしたのである。われわれはそこに、哲学者が自由と必然性を接合しようと幾度となく試みたあの結び目のまさしくゴルディアス的なものをすすんで示すことにしよう。なぜなら、もちろん正しい解釈はひとつしかないのであるが、それでも、解釈が与えられたという事実こそ、真理と呼ばれるもののなかで、存在しなかったが現実的なものとなる、この新しいものの存在への到来がかかっているからである。

この真理という言葉は、人が真理に依拠することにいっそう強く捕らえられているだけになおさらにかかわることが難しい。このことは学者に見られるとおりであって、学者は、還元不能の事実<sup>に</sup>返答することを督促されるのは常に理論の総体だという、科学史において明白な過程をはっきりと受け入れようとするのだが、このような過程として現れるのは事実の優先ではなく、きめられた領域におけるこの事実の不還元性を決定する象徴体系の優先であるという明白な事態を認めようとしな<sup>い</sup>。この領域でいかなる形にも表現されない事実は事実とは見なされないからである。科学は現実界を信号に還元して取りこんでいくのだ。

だが、科学はまた現実界を沈黙させる。だが、分析が直面する現実界は自由に語らせなければならない人間である。主体が語る者であるかどうか<sup>が</sup>決定されるのは、「私」という言葉を口にする<sup>こと</sup>で主体が実際にもたらす意味にかかっている。だがパロールの運命、つまりパロールの充溢性の条件が求めるのは、自らの人間性において問題の存在を自分の決定によって常に的確にはかる主体が、語る者であると同様に聞く者でもあるということだ。というのも、充溢したパロールの時において、両者はこのパロールにたいして平等に役割を持つからで

- 5 -

ある。

被分析者が話し始めるとき、おそらくわれわれはこの充溢したパロールの時とは遠く離れているに違いない。彼の言うことを聴くことにしよう。つまり、この不確実な「私」は、混乱した現実において動詞を通して自らを認める以上のことをするとみなされ、動詞を通して、つまり私は愛する、私は欲すると言って、「私」は「私」をその同一性において引き受け、自らの欲望を承認させなければならないのだが、この「私」を、それが動詞の前に立たなければならなくなる瞬間から聞くことにしよう。彼がなによりもこの一步に震えるのは、この一步の飛躍をいかに小さくしようと、それは不可逆的でしかありえないということ以外にはないのはどうしてであろうか。そしてまさにあらゆる解<sup>révocation</sup>任のなすがままにおそらく任せ、彼は以後解任を自らの回復のために要求するという<sup>こと</sup>において不可逆的なのだ。

この一步がいかなる重要性も持たないとすれば、通常それは聞く者のせいであるに違いない。主体の存在が、以後、おしゃべりの法の歯車に巻き込まれるかどうかは主体にかかっているわけではない。しかし、主体がこのように関わってりあう秩序に分析家が関心を持つかどうかは分析家の選択にかかっているわけでもさらさない。なぜなら、それに関心を示さないならばその人は単に分析家ではないということだからである。

その理由は、フロイトが精神分析の土台とした発見である無意識の現象が属するのがこの秩序であり、他のいかなるものでもないからである。

実際、無意識の諸規定をうまく位置づけることができるのは、われわれ語る存在においてずっと昔から婚姻関係や親族関係が根拠づけられるあの名前の枠組、諸系譜が自分たちの権利を根拠づけるあのパロールの法、諸系譜が自分たちの伝統をませあわせるあのディスクールの世界、これらのもののなか以外どこであろう。そして、主体が世に生まれるはるか以前から彼の運命だけではなく彼のアイデンティティそのものも決定していた関わり合いを外れたところで、分析的葛藤とそのエディプス的原型をいかに捉えられるのであろう。

- 6 -

欲動の働き、さらには情動性の原動力が頭脳の基盤の何らかの核に局在化されていることが発見されたならば、それは単に神話的なものには止まらないことになるが、欲動の働きは無意識にとって一方的で細切れとなった構成しかもたらさない。われわれが分析素材と奇妙にも呼ぶものを観察してほしい。素材という言葉についてとやかく言うのはやめて、言語の素材を取りあげよう。フロイトは、抑圧されたものを構成するために、言語の素材は主体によってパロールとして引き受けられていなければならない、と言語の素材を定義しながら保証する。原初的忘却が主体の歴史を捉えると言われるのは間違いではない。それはたしかに歴史化されたものとして主体が体験したことなのである。そこにおける刻<sup>impression</sup>印は体験のドラマの中の意味深いものでしかない。いずれにせよ、「情動的負荷」が忘却された過去に固着したままになっていることを、まさに無意識がすべてを備えた主体でなければ、そして情動的舞台裏の神 [ deus<sup>4</sup> ] がまさに切れ目のない弁証法の全体的機械 [ machina ] からそこに出てこなければ、どのように理解すればよいのだろう。

抑圧されたものの回帰に出てくる圧力において優先するのは、欲望に違いないが、 - しかし欲望は承認されるべきものとして、そして最初からこの承認の領域に記入されているので、抑圧の時にこの領域から退去するのは、消し去ることのできないこの記入ではなく、主体である。

ともかく、フロイトが分析の終結として要求する記憶の回復は、ベルクソンが持続の神話的統合の中で想像するような、純粹の記憶の連続性ではありえないだろうが、 - しかしはっきりと区切られた歴史の有為転変の再現であり、そこではその意味は中断されていても、問題であったもの、厳しい試練であったものは、実り多い結末、もしくは破滅を呼ぶ結末へと急進するにいたるのだ。そこでは、たとえ間違った句読点であっても、あらゆる表現はひとつの句読点によって支えられており、たとえ言葉が中断されたものであっても、あらゆる表現は何らかのフレーズのかたちをとっている。そしてそこにこそ、行為における象徴的反复を可能にするもの、そして意味が強迫のなかに表れる反復的主張の様式がある。転移の現象について言えば、それは歴史そのものの固有

- 7 -

の錬成、つまり主体がある状況を自分の未来との関係で引き受け、自らの新しい行動に応じて自分の過去の真理を再評価するというあの遡及的な運動に常に参加するのだ。

フロイトの発見とは、この弁証法の運動が主体を主体自身も気づくことなしに規定し、そしてさらには、ヘーゲルが精神現象学の原則として据えた理性の狡智のなかですでに表したように、自らの否認によってさえ規定している、ということだけではなく、 - 主体を自己意識のあらゆる実現にたいして脱中心的でしかありえない秩序のうちに構成するということである。そしてそれをとおして、このように構成された秩序は、自分自身にたいして最初に想像できたよりも常により遠くとへ限界を移行させ、人間存在の現実における支配をより強固にするのだ。こうして、ダビデ王の家系になされた約束をもたらす者を人々にかわって歓呼して迎えたのであろう石のように、そしてゼウスの意志で人間を永遠に苦しめる悪のうえに開かれた箱から「沈黙のうちに人間に降りかかる」病を生みださせるヘシオドスの言うこととは反対に、われわれは神経症において、そしておそらく神経症をこえて、語る病を知っているのである。

精神分析の概念は言語の場で捉えられ、その領域は、器官の機能、意識の幻影、身体もしくは身体イメージの部分に至るまではるかに広がり、社会的現象、象徴そのものの変貌なども、無意識の主体が意味を表現するためのシニフィアンの素材として利用できる。

これが精神分析が位置づけられる本質的な秩序であり、われわれが以後象徴的秩序と呼ぼうとするものである。ここから出発して、精神分析の方法によってこの秩序を扱うことは、それについてまさしく不可能いかなる対象化をも除外するのだと認めることにしよう。というのは、精神分析が実り多い対象化を殆ど可能にしなかったからではなく、分析は対象化を与えられたものとして支持しながら、同時に分析の作用のもとに置くことができないからなのだ。イギリス人が言うように、お菓子を食ふことと置いておくことは同時にはできないのだ。精神分析の場における任意の現象をひとつの対象としてとりあげると、たちまちこの場はその現象を根拠づける

- 8 -

ものとともに消え去る。そして、この場の支配者たらしとするなら、そこで対象として捉えられるものを支配することをすべて断念しなければならない。転換症状、制止、不安などがそこにあるのは、それらのトポロジーがいかにも興味深いものであっても、それぞれの結び目を確認するための機会を与えるためではない。問題はこれらの結び目をほどくことであって、それはつまり、これらの結び目の使用法と意味を自らの意味作用によって決定するディスクールのなかで、それらをそれら自身のパロールの機能に戻してやることである。

それゆえ、分析において結び目をほどくこと意識化に帰するのは間違っており、意識化はそのような効果を持たないこともあるというのに驚くべきでもないのだ。問題は、暗闇の中に沈んだ無意識の階から光の支配する意識の階へと、何か神秘的なエレベーターで行くことではない。まさにそこにこそ対象化があり、それによって主体は自らの責任を通常回避しようとし、またそこにこそ、知性化にたいする厳しい批判家たちが、いっそう知性をつぎ込んで、おのれの知性をひけらかすのだ。

頑迷に拒絶する人たちには悪いが、問題は実際、意識への移行ではなく、パロールへの移行である。そして、パロールは、それが誰にも読まれることさえないところで、誰かに聞き届けられなければならない。それはつまり、暗号が失われた、または受取人が亡くなったメッセージである。

メッセージの文字は、ここでは重要なものである。それを把握するためには、隠蔽でありかつ暴露という機能を持つものとして、パロールの根源的に多義的な性格にすこし立ち止まる必要がある。しかし、パロールが教えてくれることに限定しても、言語の性質からすると、パロールをいくつもの射程に従って読むことを常に指示するパロールのさまざまな共鳴から、パロールを分離することは許されない。言語の曖昧性に内在するこの分割こそが、パロールの秘密への可能な入り口の多様性を唯一説明するのだ。それでもやはり、パロールが言うことと言わないことを同時に読めるひとつのテキストしかないということはわからないし、症状は、ひとつの判じ絵とそれが表す文との繋がりと同じように緊密に、テキストに繋がっているということもわからない。

- 9 -

しばらく前から、こうした文を解読する方法の多様性と、多様性を形で表す症状の多重的決定との間に全くの混乱がみられる。自称分析的心理学の多くはこの混乱の上に構築されている。つまり、最初の特性は本質的に文脈を考慮した文の意図の多義性に由来するものであり、後のものは、シニフィアンとシニフィエの二重性がシニフィアンの使用の中に非限定なかたちで潜在的に反響するものとしての二重性に由来するものである。最初の特性のみが、あらゆる「了解関係」は不可避免的に種々の目的因をもたらしということに扉を開く。だが、フロイトの言う多重決定は決してこれらの目的因を科学的正当性のなかに再興しようというものではない。この多重決定は、何人かの頭の弱い連中がそれから学んだことで強固にできると考えている捉えどころのない精神 - 生理学的並行論のなかで因果論をうやむやにってしまうものではない。それは単に、現実界のなかの因果律の切れ目のないテキストから、現実界のいくつかの要素についてシニフィアンの使用によって設定された秩序を、象徴界の現実界への侵入を保証するものとして切り離すのだ。因果論的要請は、この象徴化作用のひとつの特別な手がかりにしか相当しないよう見えるにしても、現実界を規定する権利を失わないからだ。

この指摘は、フロイトの思想が、流行しているヤスパースの「安価な<sup>13</sup>」観念論のいかなる干渉にも負けずに対置する確固とした標石だということをあわせて示すものだということを願っている。

フロイトはおのれの思想において、実際、あまりにも一貫しているので、性的な性格を持つ過去の葛藤を再現するものとしての現在の葛藤と、器質的（損傷的苦痛または身体的迎合）または想像的（固着）裂け目という偶発的ではない支持物との間における、彼が症状の形成に結びつける多重決定は、この場合言語においてシニフィアンをシニフィエに結びつける構造でないならば、彼にとって軽蔑すべき言い逃れ以外のなにものでもないと思えたであろう。このことを無視すると、人間のおのれの対象にたいする全体的関係を、さまざまに想像された性交のファンタスムだとみなすようなことに陥るのだ。分析的思考が溺れ込んだ、そして次々と新しい怪物を生みだす、理性の休眠である。

- 10 -

なぜなら、われわれがいる地点は、分析とは、主体におけるいわゆる退行的な諸欲求を、これらの欲求を支えているわずかな現実もそれらをまったく満足させることなく、主体に固有な想像的手段を通して満足させて鎮めるためのあの畏なのか、それとも、フロイトが無意識において明らかにし、彼の最後の局所論が鮮やかに死の本能と結びつけた象徴的諸要請の解消なのであるのか、と自問するところだからだ。後の考えが正しいなら、最初のものが表す誤り、それと共に現在すべての分析実践が落ち込んでいる誤謬も明白なものとなる。

みなさんにただひとつ注目していただきたいのは、われわれにとって唯一正しい後の立場と、死の本能についての多くの物議をかもしたフロイトの立場を正しいものと承認することとの関係である。彼の業績のこの部分を廃棄することは、これは偶然ではないが、常に、そうしたと自慢する人たちがこそが分析経験の主体において彼らがパロールの彼方に置くようなものは何も求めないというんで、フロイトの業績の原則の否定にまで至るのである。

ここで精神分析と心理学との関係に入ろう。

私は同僚のラガッシュに同意して心理学的現象が表れる場の統一性を主張する。このように、われわれが精神分析的場といま定義したばかりのものは、もちろん人間の心理学についてわれわれの経験が確認するように、いや一般的に認められているよりもさらに深く教えてくれさえするのだ。このことは心理学者たちが、実験室の入り口でそれらの概念の導入を拒絶しようとしなければ、気がつくところである。この実験室の入り口では、たとえば誤って記憶における固定化に帰せられたパラドックスや、一時的迷路の学習にたいする動物の抵抗における未解決に残されたパラドックスを解決するために、どのように対象を構成するための隔離をほどこしても精神分析的諸概念が無効になることはありえないであろう

精神分析は、すべての個人を巻き込む関係において心理学に属さないものは何もないと提起することによって、ずっと存在している秩序があることを、この秩序に分析的革命をもたらして、思い起こさせたにすぎないが、

- 11 -

それでもやはり、人はこの秩序全体を否認しているということにはかわらない。

この提起は誤りであるが、それは心理学が歴史的に構成された実証的な対象化の様式にたいする潜在的な偏見があるからだというだけではない。このような偏見はわれわれが粗描した人間の諸科学の再分類のなかで取り除くことができるであろう。というのも、諸科学のあらゆる分類は、形式的な問題などとはまったく違って、それらの発展の根源的原則に依存しているからである。

心理学は人間存在の領域を網羅するものではない、ということ提起するのがわれわれにとって大切なのは、心理学はこの領域の歴史的に有効な、明確な特殊化であるし、また心理学という名の科学は、結局、前提とされたある現実から分離することができないからである。この現実とは近代と呼ばれる時代における、人間の自分自身へのあるタイプの関係として特性化されるもので、このタイプを「心理学的人間 homo psychologicus」と呼ぶことは言葉としてまったく自然であるようにみえる。

社会的、テクノロジー的そして弁証法的情勢の総体からすると、現代人の経験における自我の機能のますます大きな支配と心理学的対象化のあいだにある相関関係について、実際、いくら強調してもしすぎることはないだろう。これらの情勢の文化的ゲシュタルトは明らかに17世紀初頭に構成されている。

この種の変遷によって生まれた諸々の袋小路について、精神分析のみがそれらをつくりだしている相関関係をかいま見せてくれるが、それらは19世紀末期の文化における居心地の悪さを認めさせる強力な動機となった。そして、この居心地の悪さのなかでフロイトの発見は啓蒙の再来とも言える。それゆえ、現在のあらゆる精神分析運動が、われわれが心理学の前提と呼ぶようなものに繋がっている信仰への回帰へとこぞって押し寄せるのは、たしかに新しい反啓蒙主義である。その先頭を切っているのがいわゆる自我の総合的機能で、精神分析以前からそして分析の外で、経験と批判のあらゆる手段によって幾度となく論駁されているにもかかわらずそれが執拗に存続するのを見ればまさに迷信だと形容されるべきである。

- 12 -

フロイトが、とりわけナルシシズム理論において、すべての惚れ込み (Verliebtheit) の原動力として、そして抵抗の技法のなかで否定 (Verneinung) の潜在的および顕在的形態によって支えられているものとして示した自我の概念は、幻影と否認という自我の非現実化する機能をきわめて明確に際立たせている。彼は、自我を想像的關係の秩序のなかにはっきりと位置づける形成過程をもってこの概念を補完し、その根源的な疎外のなかに、人間間の攻撃性は本質的に主体に内在するのだと明示する母胎があることを示した。だが、フロイトの精神的末裔たちは、ある言葉に置かれたタブーを取り外してはあらゆる曲解の口実としたり、ある関心にたいする禁止を取り除いては偶像崇拜の機会として、今では、分析を吸収しつつある自我の予備教育的強化が待つ明日を準備してくれるのだ。

ともかく、この末裔たちは、おのれの分析的操作において偉大な弁証法の伝統を - 無意識の発見はこの伝統の輝かしい復帰の証拠なのであるが - 認めなかったがために、無意識の発見の意味を吸収する時間を持たなかった。まったく反対に、フロイトのエピゴーネンたちは象徴化する素材にたいして、素材そのものの奇妙さはともかく、その構成が主流をなしている科学のスタイルとは対照をなしていたのでやがて羞恥心にとらわれた。というのも、この構成は、この科学が、数学的なものにせよ他のものにせよ、気晴らしとして片づける、そしてさらには中世において文法から幾何学、修辞学から音楽に至るまで知を秩序づけていたあの学 <sup>arts liberaux</sup> 芸を思い起こさせる、あの特権的な一連の遊びのかたちをとっていたからである。

とはいえ、あらゆるものが、本質的な方法においてもっとも発展した弁証法的方法を認めるように彼らに促している。この本質的な方法を通して、精神分析は、自らの経験において特殊と普遍を結びつけ、理論において現実的なものを合理的なものに従属させ、技法において主体を対象にたいする自らの構成的役割にたち戻させ、いくつかの戦略において結局ヘーゲルの精神現象学と合致する。たとえば、美しい魂のディスクールへの反駁において、美しい魂の反抗が主題となる世界の混乱にこの魂がもたらす救援のようにである。この主題についてつ

- 13 -

いでに言うと、世界という舞台でカモインシス<sup>6</sup> という大変に外向的な征服者によって、彼の偉大な詩のひとつの表題のなかでこれが生みだされたことを思いだすならば、この手合いのものは孤独な散策者の内向性から来るものだとすることはできない、

ドラが、父親の不品行から彼女を売ることになった憤慨すべき状況についてフロイトに不満をぶちまけるときも、じっさいフロイトが配慮するのは心理学ではなく、患者の自我を強化することでも、患者に欲求不満を耐えることを教えることでもない。彼が彼女にするのはまったく反対に、この状況そのものに目を向けさせることで、彼女が常に積極的にこの状況を支持しており、それ抜きではこの状況は一時も続かなかったであろうという告白を得ることであった。

3 2 3 2 2 2 2 2 2 2 2

いずれにせよ、この弁証法の行使のみが、それ自体患者においてよけいに抵抗を生みだすだけの二者關係的状况と分析経験を混同することを避けさせてくれる。こうした抵抗に対して分析家は、逆に、自分自身の抵抗に身を任せて対処しようとし、結局もっとも優秀な人たちも何のとまどいさえも感じずに認める方法にたどり着くのである。つまり、彼らが言うには、患者の自我の「健康な部分」に同盟を求め、他の部分を現実に応じて修正するということである。そこにあるのは分析家の自我のイメージにそって患者の自我を作り直すということ以外の何であろうか。これはじっさい、有無を言わさない「自我の分裂」(splitting of the ego) の過程として描かれ、主体の自我の半分は心理学的バリケードのよい方の側、つまり分析家の技量が疑い得ない側に行き、次いで残りの半分の半分が行き、そして後は同様である。この条件においては罪人、つまり神経症者の改革に希望が持てることわかる。少なくとも、または神経症者の改革ではなくとも、耳障りではあるが、おのれの救済に確信が持てる「精神分析的人間 homo psychanalyticus」の王国への入場が期待できることわかる。

それでも、自我はせいぜい主体の半分でしかないのであり、これは精神分析の基本的な真理である。そのうえこの半分はよい方ではないし、主体の行動の導きの糸を握っているわけでもなく、面倒の種となるもの、それ

- 14 -

も少なからずそうなるものである。しかしそれはどうでもよいことだ。しばらく前から、抵抗において主体は、自ら認める倒錯、つまり節操を欠いた情熱の道 [ strada<sup>7</sup> ] のなかに紛れこむまでの悪智恵を働かし、明白な事実  
に屈するのを避けようとするのを各自は知らないであろうか。すなわち、最終的分析によれば、この主体は前  
性器期的な人間、つまり利害関係者であり、 - そこではフロイトはベンサムに後戻りし、精神分析は一般心理学  
の故郷に戻るのである。

それゆえ、一体となって成立しているこのようなシステムを攻撃するのは無駄であって、それが精神分析と  
名のことに異議を唱えるぐらいしかできないのである。

われわれとしては、経験のより弁証法的な視点に立ち戻るために、分析は分析家の寝椅子に横たわっている  
人間と語る人間とを区別することから成り立っていると云おう。聞く人間も入れるとすでに分析的状況には三人  
の人間がいることになり、その間ではヒステリーのあらゆる材料の基本である、主体の自我はどこにあるか、と  
いう問を出すのが慣例である。このことが一旦受け入れられたあとと言うべきは、状況は三者的なものではなく、  
じつは四者の状況だということであり、そこにはブリッジにおけるように死 [ ダミー ] の役割が常に加わり、そ  
れを考慮に入れないと強迫神経症について何らかの意味あることを言うのは不可能なほどである。

いずれにせよ、すべての転移が秩序化される場であるこの構造の媒介をとおしてこそ、われわれが神経症の  
構造についての知を読むことができたのである。同様に、パロールの媒介が分析構造に本質的ではないならば、ひ  
とつの分析を、それにたいして言語的關係しか持たない分析家が制御することはまず考えられないであろう。だ  
が、パロールの媒介は分析関係のもっとも明確でもっとも実り豊かな様式のひとつなのである（報告を参照する  
こと）。

おそらく、古い、いわゆる「素材の」分析は、心理療法的還元というますますあいまいな概念によるダイ  
エットに捕らわれたわれわれの精神には古びた感を与えるに違いない。とはいえ、その臨床的な遺産を再考して

- 15 -

みると、それはフロイト的分析を原則において再考察するわれわれの試みと同一平面にあることが明らかになる。  
この古い段階を位置づけるためにわれわれは、先ほどすぎた時代の科学を持ちだしてきたので言うが、思い出して  
欲しいのは、この科学の象徴的実行において含まれる智恵と、未だ乳白色のガラスの瓶が割れるとき<sup>8</sup> に人間  
がそこから得られた興奮である。私はそこからみなさん方を導くしを引きだすことにしよう。

みなさんの探求にはいくつかの道があり、それと同時に、禁止、流行、「古典主義」への要求、しばしば理  
解不能な規則、そしてとどのつまりは諸々の欺<sup>mystifications</sup> 瞞<sup>9</sup> と、これらのものの名のもとに、至るところからこの道  
におかれた束縛がある - ここでこの欺瞞という言葉は現代哲学がこの言葉に与えるテクニカルな意味合いを持た  
せている。しかしながら、これらの神<sup>mystères</sup> 秘とその疑わしい番人たちを特徴づけるものがなにかある。それは、彼  
らが自分たちの努力を傾け、論証を適用する任務と用語の、ますます深刻な行き詰まりである。

それゆえ、彼らの誤りを確実に示すし何が何であるかを学んでいただきたい。精神分析は真理の源泉だと  
すると、それはまた智恵の源泉でもある。この智恵は、人間がおのれの運命に直面するときから、決して裏切っ  
たことはないひとつの側面を持っている。あらゆる智恵は悦ばしき知<sup>gay savoir</sup> である。それは自らを開き、転覆させ、歌  
い、教え、笑う。それは言語のすべてである。ラブラーからヘーゲルに至るその伝統から滋養を摂るのだ。そし  
てまた、庶民の歌、街角のすばらしい会話・・・に耳を開くのだ。

みなさんはそこから、人間のなかで人間的なものを明らかにする文体と、それ抜きではけっしてパロールを  
解放することができない言語の意味を受けとるであろう。

発言への返答

1953年11月27日

- 16 -



出された質問への返答を時間的な理由で回避することはどの質問にたいしても許されないであろうし、ひとつの質問への返答は他の人からの同様な質問にたいしても有効であると望むことは、私の講演の後では専断の感を逃れられないであろう。それゆえ皆さんに返答するにおいてこれらの質問を選択するのは、質問がすべての人に有効でなければ、どの質問にも満足な返答を与えられないと思うからである。

まず最初に、ダニエル・ラガッシュに、私の報告の方向性と影響を一貫した明晰さをもって皆さんに紹介していただいた配慮に感謝したい。私の作業はアカデミックなディスクールの規約とははっきりと断絶しているという彼の指摘はまったく当を得ているにもかかわらず、学位論文の公開審査でもこれ以上厳粛にはできないほどであった。

だから、彼が私の報告を - 彼の言葉を借りると - <sup>raison raisonnante</sup> 推論する理性によって復元する秩序は、私が持っていた、そして文字通り「真実の」と言いたい意図にたいして与えられた荣誉だとしか思えないのである。「真実の」とは、そのような念を抱かせるものというよりもこの意図が目指すものを表している。

まさにひとつの真理、これが私の講演の内的な一貫性の唯一の中心であり、皆さんがわれわれの未来の仕事において真理に訴えるなら、この中心によって私の講演が皆さんにとってそれが本来めざすものとなることを強く望むのだ。未来の仕事とはつまり、現在のなんらかの問題につねに縛られている教育において時に欠如していると感じられるあの基本、初歩的事項であり、それはまたこの教育が自らの位置づけ、準拠の中心と方針を見いだす、パロール、主体、言語、という弁証法的概念に関係するものである。このように言うのは、これらの概念を、それらが解消しようとする実体化を繰り返す機会となるだろう形式的定義において提起することによってではない。言語の世界のなかでこれらの概念を皆さんの手の届く範囲に置くことによって言うのである。そして、言語の世界においてこれらの概念は、それらがこの世界の運動を支配することを強く望む契機において記入される。というのも、これらの概念の使用がなされる新しい意味においてそれらを再び取りあげることができる正確

- 17 -

な使用法にみなさんが気がつくのは、この講演におけるそれらの構成に参照することによるからである。

ここで、ある発言の際に、不完全な状態だが、驚くべき形で出されたように思える問いに触れたい。

それは、人間が現実界の事実と同じように事実を受け入れなければならない言語という手段と、間主体的関係のなかで主体を構成するものとしてのパロールの機能であろうあの創設の機能との間の関係はどのようなものなのか、と質問されたように理解している。

私の返答は次の通りである。言語を、分析経験を再整理する媒体とするとき、われわれが強調したいのは、この媒体という言葉が含む手段という意味ではなく、場所という意味であり、またそう言うことは何の比喻でもないということを示すために、それはさらに幾何学的場所だとまで強いて言いたい。

このことは、われわれはこの場所に肉として骨として、つまりわれわれのすべての肉体的、共感的複雑さとともに住むのではないということ否定するのではないし、また、そこではあらゆるものがまさにわれわれの関心を惹くすべてのものとは無関係なので、この場所の支配はそこにある諸次元のなかで展開された <sup>correspondances</sup> 照応 からかくも離れたところまで進むのだということ否定するものでもない。まったく逆である。

人間間のコミュニケーションの理論の基本がこのように描写されるが、われわれの経験のみがおそらく、このテーマのもとでなされる流行的思弁の犠牲になる貧弱でせつちな定式のあの濫用とは反対にこの原則を守る立場でいられるであろう。

それでもやはり、この報告においてわれわれの知るかぎりでは言語の表現的機能について一度しか言及されていないところを見ると、われわれの言語についての考えがはっきりと導びかれるのは、コミュニケーションの概念に固有な偏見の中であることに変わりはない。

では、言語が意味することを、言語が伝達することのなかで明確にしてみよう。それは信号でも、記号でも、外的現実としての物のしるしでさえもない。シニフィアンとシニフィエの関係は両項を全面的に条件付ける言語

- 18 -

の秩序のなかにすべて含まれている。

まずシニフィアンという項を調べてみよう。それはひとつの構造によって結ばれている物質的な要素の集合によって構成されており、この構造についてはいかにそれが要素としては単純であるか、さらには、どこにその原点をおくことができるかということを示すことにする。だが、唯物論者として見なされるのを覚悟で言うと、われわれの主題であるこの場所の問題において、まず最初に私が強く言いたいのは、ひとつの物質が問題になっているという事実であり、そしてそれは、この物質によって占められている位置を強調するためである。これは消去法によって人間の脳を言語的現象の場所として強いるようにみえる幻影を単に破壊するためにそうするのである。言語はいったいどこにあるのだろう。シニフィアンはこう返答する - 他のあらゆるところにある。この机の上には多少とも分散して一キロのシニフィアンがある。私の講演が今まで録音されたテープレコーダーのテープとともに巻き込まれたこれこれのメートルのシニフィアンがある。シニフィアンをハートリー単位という無意味な単位に還元して産業的実践の確実なものなかに組み入れたのは現代のコミュニケーション理論のなしたおそらく唯一だが無視できない功績であろう（このことは万人にとってこの理論に科学的な非課税証明書<sup>10</sup>を与えるのに十分すぎる程であった）。ハートリー単位とは、もっとも基本的な交代に応じてあらゆるシニフィアンの集合の伝達能力を計る単位である。

だが、そこから帰結する明白なもの心髄は、われわれが関心を示すものとしてすでにラプレーによって作られた凍結したパロールという神話の中にあつた - 私はこれについて評価できると言わなかったであろうか。もちろんそれは作り話とか空想であるが、そこからくみ取れる精髓<sup>11</sup>が示してくれるのは、音の物理学的理論がなくとも、私のパロールはそこに、われわれの間の空間のなかに、私の声門からみなさんの耳へとパロールを運ぶ音波と同一なものとしてある、という知から生まれる真理に達するのだということである。これについて現代人は何も気がつかないが、それは人が考えるように産業的実践の確実なもの - これについて笑ったことを許し

- 19 -

ていただきたい - が悦ばしき知を欠いているということのためだけではなく、おそらく何らかの検閲のためであろう。なぜなら、ラプレーの神話が証明する先見の明にたいする現代人の嘲笑は、それが何の先見なのかという問を隠してしまったのだ。つまり、この空想は蓄音機という現代的実現を予見するというのが真実なら、この実現に含まれる意味の何がこの空想の作者を導いたのかということである。

シニフィエに移ることにしよう。それは物ではないと言ったが、では何であろう。まさに、意味である。遠いところに例を求めなくても、私がここでみなさんにするディスクールをとりあげると、それはおそらくわれわれに共通の経験を目ざしているであろうが、このディスクールの価値はそれがみなさんにこの経験の意味を伝えることによって評価されるのであって、経験そのものではない。経験に固有な何かを伝達したとしても、そうするのはすべてのディスクールが経験に関係するかぎりのみであって、この問題は、まさに未解決の問題だということによって、私の発表の重要性はこの問題にこそかかっているということを示すものである<sup>12</sup>。質問者には良識が大いに備わっており、先ほどの再び出された問への返答を曖昧なものにはしたくないので、その問を再提起するならば次のようになる。

「ではこの意味は、どこにあるのか」。ここでの正しい答え - 「どこにもない」は、シニフィエが問題であるときにはシニフィアンにあつた返答とは反対であるにしても、それにたいしてなにか「諸物の名称」のような返答を期待していたならば、やはりこの問を満足させるものではないだろう。なぜなら、名詞に諸物の名称を割り当てる文法上の見かけとは反対に、いかなる「ディスクールの部分」もそのような機能の特権を持たないうえに、意味はディスクールが展開する意味作用の単一性のなかでしか明確にはならないからである。

このように人間間のコミュニケーションは常に、情報に関する情報であり、言語共同体の試練のもとに置くこと、それ自体原初的競合から生まれた諸対象を囲む目標の枠に番号をふりあてて焦点を絞ることである。

ディスクールが諸物に関係していることは間違いないだろう。現実の諸物が諸物となるのはまさにこの出会

- 20 -

いからである。語は物のしるしではないからこそ、物そのものになろうとするのである。だが、それはまさに語が意味を捨てるかぎりにおいてである。ただし、呼びかけという意味は別であるけれども、いずれにせよ、次のような場合には呼びかけの意味もむしろ作用しない。つまり、「女」という言葉を発すると人間的形態が現れることは総体的にみてまず皆無であり、逆に女が現れたときに「女」と叫ぶことは女を逃げさせる可能性が大きいということであるとおりである。

伝統的なかたちで私に反対して、語に意味を与えるのは定義であると言うならそれでもよいだろう。だがそこで言えるのは、各々の語はその使用において辞書のディスクールの全体・・・さらには特定の言語のすべてのテキストを前提とするということだ。そしてそれも私が言うのではない。

アリストテレスの論理学が現実的な支持を求め、聖書の創世記に命名との関係がすでに十分に示されている生物の種類の場合を別にして、すべての物化は混乱を含んでおり、象徴界と現実界の間にあるその誤謬を修正することをわきまえなければならない。

物理学という科学は、象徴界を、現実界を分離するための道具の機能に還元して、根本的にそれに対処した。そしておそらくはそれに成功したには違いないが、このような原則によってこの成功は、この原則が意味する、存在についてのあらゆる知識の放棄を日ごとに明らかにするのだ。そしてこの放棄は、<sup>élan</sup>存在者という言葉は物理学という言葉のそもそもまったく忘れ去られた語源に由来するものとして、存在者についてさえ及んでいる。

まだ自然科学と呼ぶに値する科学については、アリストテレスの動物史以来なら発展を見ていないことは一目瞭然である。

残るはいわゆるさまざまな人間科学であるが、それらは長い間方向を見失っていた。というのも、自らの合理化に内在する何らかの否認と引き換えによってしか支持することができなかった原則的なニヒリズムを認めることが厳密科学の威信によって阻まれたためであった。そして、今日においてやっと、厳密科学と距離を置くこ

- 21 -

とを許す定式を見いだすのだ。それは諸々の人間科学を推測的科学として性格づける定式である。

だが、そこではやがて人間は、人間を家畜の頭数のようにしか「数え」ない諸技術においてしかまともには現れないであろう。いいかえると、もしわれわれ精神分析家が人間の存在のなかで象徴界にしか属さないものを評価することができなければ、やがてそこでは人間は、物理学において自然が消去された以上に消去されるであろう。

しかしやはりそこにこそ、いかようにも物化できないものがあることには変わらない。それは自然数の級数とか数学的期待値という概念とかにたいしてできないというほどに物化できないのである。

しかしながら、私の弟子のアンジュが陥ったのは、この過ちである。彼は、象徴界を現実界から正しく区別せず、せいぜい象徴界を因果の連鎖における手段として組み込むしかできない人たちにとって実際大いに厄介な言語の魔術的概念を私に負わせることによってそこに陥ったのだ。なぜなら、この考えは正しい考えを見失うと避けられないものとなるからである。つまり、聖書が言うように、「私が召使いに行けと言うと、彼は行く」、「来いと言うと、彼は来る」のである。すべてこのようなものは、いかに日常的なことであっても、間違いなく魔術である。そしてまさに、すべての自己の否認は投影によって表現されるゆえに、わが友アンジュよ、あなたには私がこの錯覚の犠牲者だと見えるのだ。というのは、われわれの経験を諸物の秩序のなかで理解するために、言語は私が自由に選択できるさまざまなモデルの中のひとつでしかないようにあなたには見えるとき、あなたが身を任せている錯覚を認めてほしいからだ。あなたはそこで、この秩序が書かれるのはインクによってであるから、言語はこの秩序の中で、いわば、シミをなすのだということに気づいていないのだ。

実のところ、この秩序は多くの領域に、原因という概念がそこでの出入りを規定する以前に、書き込まれている。言語の場が方向づけられる種々の極の間で引かれる秩序の線は多数ある。そして語の極からパロールの極へと向かうために、私は最初の極を、象徴界の最も現実的な効果と、シニフィアンにおける意味的に最も空虚な

- 22 -

物質との交点として定義する。この場所は、合言葉というものが、通常その特徴とされる無意味と、それがもたらす、人間のおのれの同類への根源的な敵意の中断という二面性のもとで占めるものである。それはおそらく、諸物の秩序の零点であろう。なぜなら、まだそこにはいかなる物も現れてはいないが、言葉を持つ者は死を逃れるのであるから、それはすでに人間が自分の力に期待できるすべての物を含んでいるからだ。

これは言語の素材に繋がる承認の威力であるが、いかなる具体的なディスクールの連鎖が、主体に根拠を与えるものとしてのパロールの作用にこの威力を結びつけるのだろうか。

未開人がパロールという語に与える使用法によって、彼らがパロールの概念に与える拡張を知っていただくためにレナール<sup>113</sup>の「ド・カモ」という多少混乱しているが大いに示唆的な本を紹介したい。この本を紹介するのはさらには、われわれにとってたいていすでに既知のものとなっている秘密をもつ、そして自らの産物および産物の交換の根本的に象徴的な機能が確認される、あのさまざまな技術の有効性にパロールを結びつける本質的な繋がり - それはここで根源的なものとしてさらに驚くべきものだが - を知っていただくためでもある。

だが、レヴィ・ストロースによってもたらされた証明ほどわれわれの主題を厳密に根拠づけるものはない。それによると、親族の基本的構造の総体は、それが前提とする命名の枠組みの複雑さを越えて、言語の変遷において文献学が証明する無意識の効果としか並べられない組み合わせの潜在的意味を示している。もっともこの組み合わせはわれわれの計算によって初めて明らかになるものではあるが。

形態学的集団の原初的体系に従って言語が配分される文化圏と、系譜の秩序を土台にして婚姻関係の法則によって範囲が限定される文化圏との一致についての指摘は、交換の一般的理論に収束する。この理論において女、財産そして語は同質なものとして現れ、ひとつの象徴的秩序のあの自律性として頂点に達する。この象徴的秩序は象徴のあの零点において顕著であり、マナという概念がこの零点について常に与えてきた予感をこの著者はそこで形式化している。

- 23 -

ラプレーが親族関係を秩序化するような民族の神話を、単に外見上でしか自然に適うように見えない命名とは厳密に反対の命名として想像していることを鑑みると、科学の多くの成果はすでに悦ばしき知として出されていたのだと再び言わずにはいられないであろう。この神話によって、親族関係の連鎖と世代間を現実には織りなす緯糸とのあの区別はすでに提示されていたのである。そしてその世代間の編み上げは、まさに個人的な無名性に象徴的なアイデンティティーを置き換えるというモチーフを何度も繰り返すのだ。禁止が自然的必然性もなく欲求に対立すると同様に、このアイデンティティーは、実際は現実に逆らってやって来る。父性の現実的關係、そしてさらには母性のそれ、これらは現代科学の新しい発見であるが、この両者さえ例外ではない。アイスキュロスを読めば親子関係の象徴的秩序は現実的關係とは関係ないということが確信されるであろう。

それゆえここにあるのは、自らのパロールに意味を与えるドラマにおける役割を、自分が誕生する以前から決定しているあのディスクールのなかに組み込まれた人間である<sup>114</sup>。こうしたことが、弁証法においても直線は最も短い線であるなら、言語における語の機能からパロールの主体への影響へとわれわれを運ぶ道を描くための最短の線である。

とはいえ、他の多く道がこの論述において自分たちの平行な層を、この言語の場の紡錘形の連鎖に提供し、そこでは連鎖の連続における現実の捕獲は単に象徴的秩序の包み込みの結果でしかないことがわかる。

それを証明するにはこれらの道を一巡すればよいであろう。とはいえ、そこにおける特権的な一契機を指摘しておこう。この契機は、われわれがついさっき世界の方向を原因の連鎖に戻した契機に必然的に先行するものだということを思い起こさないならば、忘れられてしまう。

長い間パロールの絶対性に対抗する唯一の試練であった神明裁判から真偽の決定が解放されるには、アゴラの論争によってさまざまな部族の対立する言葉に「より純粋な意味<sup>115</sup>」が与えられる活動のなかで、正しいとは常に反論者にたいして正しいのだという弁証法的論争から諸規則が引きだされることが必要であった。

- 24 -

これは間違いなく、ギリシャの時代への永遠の賛辞に値する歴史的契機、いわば奇跡なのであり、われわれがギリシャ時代に負っているものである。だが、この契機において内在的な進歩の生成を実体化するのは間違っているであろう。なぜなら、この契機は、忘れ去られるべきではないがこの進歩においてはっきり位置づけできない、多くのビザンティン文化をその後引きこんでいるうえに、完結した因果論においてこの進歩に想定されるような終末そのものを、他のものを永遠に絶対的な過去に送ってしまうほど決定的な段階にすることはできないであろう。

私の講演の論拠がみなさんに納得がいかないものなら、魔術のようにみなさんの家の前で起こっていることにどうか目を見開いていただきたい。

というのも、象徴的秩序について言えば、つまりここでわれわれの主題である言語の場について言えば、すべては常にそこにあるのだからである。

そこにこそ、人間の本性において進歩への傾向があるということに有利に働くあらゆる事実にたいしてフロイトが明確に唱える異議を理解しようとするなら、記憶にとどめておくべきことがある。これは断固とした態度の表明である。しかしながらそれでも、このことはフロイトの学説の経済を犠牲にしても無視されている。この無視は、ベルクソンも含めた公認の思想家たちのおかげでこの分野においてわれわれが慣れてしまった真剣さの欠如、 - 決まり文句になった反動的思想にたいしてなされるように見える反響、 - フロイトの書いたものから、つねにそこにあるとやはり確信できる意味を引きだすことをやめさせる怠慢、これらのものからやってくるに違いない。

フロイトが自らの頂点にいるときのあの判断を信用するなら、フロイトは「オオカミ男」に関して、この神経症者において非常に顕著な、過去の性的概念や対象への態度と自分で獲得できた新しいものをごたませにしておくという態度について、12年前に彼が示した驚きをなかつたことにしていないか。そしてこの症例におい

- 25 -

て、象徴界についての彼の感覚がこの症例を理解するために彼をすでに巻き込んでいた道が意味する以上に、体質的な特徴という仮説にそれ以来立ち止まっていなかったか。実際われわれはこのように自問できるのではないだろうか。

なぜなら、最初からこの神経症的現象を、古代エジプトについての碩学的嗜好によって彼が注意を引かれた、多少とも厳密に宗教的意識と呼ばれるものがそれぞれ全く異なる時代に属する神学が古代エジプトのさまざまな時代において共存していたという歴史的事実に近づけると、彼が依拠するのは、もちろんなんらかの曖昧な民族心理学ではなく、われわれがまさにここで言及する秩序だからである。

だが、人間と言語の関係を理解するために、とりわけどのような必要性から時間的に、さらには空間的にそれほど遠くまで行かなければならなかったのだろうか。民族誌学者はしばらく前から、研究対象を自分たち自身の首都の郊外に見いだすことができるという考えを受け入れようとしているというなら、われわれは寝床と机 - 精神分析に使われる家具のことを言っているのだが - だけを作業領域にするということによって彼らよりも一歩進んでいる。そうすると、たとえば退行という概念の批判において - この概念が導入されてすぐにフロイトは弁証法にはっきりと区別された諸形態のもとでこの概念を提示したが - 少なくとも、これらの諸形態を外れたところにその基盤を求める必要がないのであれば、われわれは彼らにたいする遅れを取り戻す試みができないであろうか。そうするかわりに、われわれは習慣によってそれを情動的退行というますます粗雑になっていく比喩的使用法に還元してしまうのだ。

(ここまでは2005年7月に修正済み)

パロールの極という言葉の場のもうひとつの極に集合するのは、それゆえディスクリールの本一の線ではなく、

- 26 -

すべての線である（そしてそれぞれの線は自らの領域において意味決定の効果、つまり理性の効果を含んでいる）。この極は際だった形態として自ら示す構造の特異性において語の極に負けてはいない。後者において、承認行為の最善の効果と言語の純粹物質性の合致が問題だとしても、ここでは最も逆説的な伝達の形式が、承認の意図からいわば分岐するのである。経験が教える通りにそれを定式化することに躊躇しないなら、そこでは主体間伝達の一般的等式が明白な用語で得られる。このことにおいて現代コミュニケーション理論に必要な捕捉が与えられるが、この理論はわれわれの場のもうひとつの極に参照して初めて意味を持つ。この定式は次のものである。すなわち、パロールの作用は、主体がそこでおのれを根拠づけようとするかぎりにおいて、発信者は自らのメッセージを伝達するために受信者からこのメッセージを受けとらなくてはならないようなものであり、それもメッセージを逆転したかたちで発信することによってのみ可能である。

超越性の前とか約束のパロールを信頼する人間の前で誓う関係、そして他者によるすべての仲裁を拒みおのれの意識のみにおいて自らを確立する関係、承認の関係においてきわめて離れたこれらの意図によって、相反する角度からこの定式を試練するために、これらの二つの場合において、この定式をその形式的連続のうちに確認しよう。

最初の場合、それは「おまえは私の妻だ」または「あなたは私の師だ」において見事に現れる。主体がおのれを根拠づけるパロールの他者自体を、少なくとも主体がその約束を放棄するのに必要な時間だけでも、信頼しないでは、これらのパロールをとおして主体は結婚または師弟関係における献身的な賛辞を一人称で誇示することはできない。そこで典型的に見られるのは、パロールはそれらの主体なかの誰のうちにあるものでもなく、各自が誓う信念がいかに軽くても、それらの主体を根拠づける誓いにあるのだということである。

二番目はパロールの拒否の場合で、それはパラノイアの主要な形態を定義するものではあるが、それでも、古典的臨床が基礎的現象を示すために解釈という用語を選択することによってすでに予感していたひとつの弁証

- 27 -

法的構造を示している。主体の無意識を構成する言い表されなかったメッセージから、つまりフロイトが慧眼にもそこで解読した「私は彼を愛する」からまさに始めて、フロイトと共にこのメッセージがそれぞれの場合のなかで屈折する妄想の形態を順を追って取りださなければならない。

周知のように、このメッセージの三つの項を順次否定することによって、フロイトはそこからソフィストの詭弁術との比較がふさわしいような推論をするのである。

そこに、より厳密な弁証法の道を見いだすのはわれわれの仕事だが、主体間の伝達についてわれわれが与える定式は、それに負けずばらしい利用を許すのだということを今から確認しよう。

この定式は、- ここでは「おまえ」が除外されていることによる象徴的反転が主体の存在の転覆を引きおこし、- 他者によるメッセージの受信の形態は自我の想像的逆転に類落しているということによって、単に想像界と象徴界の分離の諸効果を認めることにわれわれを導いてくれる。

これらの効果はそこで分離したままであったとしても、それらが主体にとって存在の最も小さい転覆に向かうのは、つまり主体に恋愛妄想における憎悪 - への - 存在を回避させるのは、やはり「おのれの名前を明かそうとしない」感情的（同性愛的）対象の上にそれらが加えられてであることは変わらない。恋愛妄想では「私は彼を愛する」は象徴的反転において「私が愛するのは彼ではなく、彼女だ」となり、「彼女は私を愛する」（女性患者の場合には「彼」）という想像的な逆転のうちに終わる。しかしながら、「試練」にたいする抵抗において示されるヒロイズムが、その感情は真なるものだと一時的に欺いたとしても、そこで関わる他者の厳密に想像的な機能は、アバンチュールに向けられた普遍的関心において十分に暴露されるのである。

「彼を愛するのは私ではなく、彼女である」、そして「彼は彼女を愛する」（女性においては代名詞が変わる）への変化によって、象徴的そして想像的なこれらの二つの効果が逆に主語の上に加えられると、- それらは嫉妬妄想に至り、その文字通り解釈的な形態は他者の一般的構造そのものを明らかにする諸対象の無限定な拡張

- 28 -

を含むが、そこでは主体の存在のなかで憎悪が思いがけずやってくるのである。

だが、〈他者〉による仲裁の拒否によって同様に非主体化される二つの項の上で、反転がパロールの効果に屈折させ、「私は彼を憎む」の主体をこのパロールの潜在的否定から、このパロールを第一人称で引き受けることの不可能性によって、自らの妄想が想像する共謀関係の際限ない網目のなかでの迫害的解釈の投影的な断片に追いやるのは、潜在的パロールが根拠づける関係にこの反転をもたらしてであり、- それと同時に主体の歴史は、われわれが学位論文のなかで文字通りパラノイア的だとしてその現象学を強調した、時間空間的規定のまさに想像的な退行において崩壊する。

皆さんのなかの何人かの方で、この点で私のディスクールが示唆する「弁証法論者でなくば、この門に入るべからず」がすでに口元から出かかっている方がおられるならば、そこに弁証法論者の力量も認めていただきたい。

なぜなら、われわれが妄想構造の展開について試みたばかりの弁証法的分析だが、フロイトは単にひとつの近道をそこに見つただけではなく、それは「あまりにも言語的」な推論だということに気かける様子もなく、文法的形態に密着してそこに道をつけその中心を与えたのである<sup>16</sup>。

弁証法の術に熟練しているからといって、思想家でなければならぬということはない。これは皆さんがすこしだけ利口になって、パロールに思考が含まれているなどと信じるのがなくなれば簡単に理解できるであろう。なぜなら、パロールは思考が空っぽであることにきわめて満足するうえに、思想家に言わせば、まさに人間が通常するパロールの使用にとって、パロールについてなんらかの考えることがあるとすれば、それはまさしくパロールが人間に与えられたのはおのれの思考を隠すためだということであるからだ。たしかに、日常生活では、なんらかの手管を使っても「それを隠す」ほうが良いであろう。このことは、いかにお腹がごろごろ鳴るようなことに通常思考という勿体ぶった名前がかぶせられているかということに気がつけば容易にわかるであろうし、

- 29 -

また分析家ほど自分はそのことを知るために支払われているのだとひとりてつぶやけるものはいないであろう。思想家たちの意見は、しかしながら、われわれによってさえ、あまりまともにはとられていないが、それは彼らの正しさを認めるものでしかないし、またわれわれがここで支持する立場、そして事実上万人のものであることによって強化される立場の正しさを認めるものでしかない。

思想家たちの共通したペシミズムは、それでも、パロールの自律性ということに賛同する唯一のものではない。昨日、われわれすべてが明晰なフランソワーズ・ドルトのディスクールに感激したとき、そして私の友情のこもった抱擁のなかで彼女の口から神聖な声を聞かされたとき、彼女は私に現場を押さえられた子供のように答えた。「私は何を言ったのでしょうか。私は話すことに大変胸がいっぱいで、言うことについて考えられませんでした」と。そのはずである。フランソワーズ、小さなドラゴンよ（アポロの蜥蜴<sup>17</sup>を問題にしているのでないのにどうしてそれを小さなというのだろうか）、あなたは考えなくても、われわれにパロールを贈与してくれるし、それについて大変上手に語ることをさえることができるのだ。あなたのディスクールを吹き込んでくれた女神自身さえも、それ以上に考えていなかったにちがいない。神々は現実界がパロールに提供する想像的開口にあまりにも一致しているので、パロールが思考になるために何人かの人間が危険を冒した、あの存在の変換によって心を引かれることはない。パロールがなる思考、それはパロールが現実界に導入する、そしてそれ以後象徴の支えのなかで世界を回る、無の思考である。

デカルトのコギトにおいて問題なのはこのような転換であって、それだからこそデカルトは、人間の良識に信頼をおくことで彼の懐疑の恩恵をいかに遠くまで広げようと、彼がそこで根拠づける思考をすべての人間に共通な特徴にすることは考えられなかったのだ。そしてそれが、アンジューが引用する『方法序説』の一節のなかで、延長における人間の見せかけと人間を区別するために、パロールの基準としてここでわれわれが与えるもの自体以外にはいかなる基準も示さずに、デカルトが証明するものである。それは彼が、現代人がいわゆる刺激 -

- 30 -

反応の回路のなかでするまやかに、まさしく次のように前もって反論して、それを示している通りである - 「なぜなら、どこかにさわると、どうしてさわるとか」と問い、他のところをさわると痛いとか叫ぶような、自らの諸器官においてなんらかの変化をひきおこす身体的作用について言葉を話すようにつくられた機械をたしかに考えることができるからだ [ ... ]」。そして彼の言う機械には欠けている二重の基準、つまりこれらのパロールを、「機械が多様に」そして「自分がいる前で言われることのすべての意味に答えるために並べる」ことは可能にはならないだろうということに信頼するのだ。それは、結局、シニフィアンの結合関係の置き換えと、われわれが語とパロールを言語のなかで特徴づけるシニフィエの根本的な主体間関係性という二項である。

アンジューが私に反対して主張するのは、私が疑問に思うパロールと思考との調和についての月並みな偏見からきている。デカルトもどうすることもできないあの例の不適切さについては触れないでおく。というのも、自動人形は、彼の時代にもてはやされていた動きのある模造物という側面からのみ取りあげられたのであるが、それにたいして機械は象徴的要素の集合として - いつかこのことに立ち戻ることにする - 現れるのであって、この集合は、方向づけられた諸系列に「多様に整理される」ようにまさに組織化され、そして自分の言語で出された問いの「意味に答える」ことが十分に可能なので、誤って思考としてそれに当てられたものを正当にパロールの半分の機能に帰することができるからだ。

そしてこのことは、アンジューがやはり無視していると私は言いたい、シュールレアリスムの意味に直接われわれを運んでくれる。われわれに遺された、この意味と心的自動症との混同を、われわれの分野の心理学へのある種の後戻りの常套句であるが、またそのもっとも明白な口実でもある、「魔術的思考」の責任にしてそうするのだ。

シュールレアリスムは、人間関係の象徴的秩序への開示という共通の痕跡によって現代をしるしづける一連の出現において自らの地位をたしかに確立している。デューラーが版画にした、分娩中のメランコリーの世界を

- 31 -

パロディー風な戯れで活気づける幼年時代のキリストの姿のように、シュールレアリスムのもっとも子供っぽい創造物はより重大でより陰鬱な出来事を予告していた。混乱した象徴と分断の幻想が混ざったパニックとして、シュールレアリスムは人間主義的個人主義の規範が消失する低気圧の縁の竜巻のように現れるのだ。自意識の自律性はすでにヘーゲルにおいて〈知〉についてのディスクールの完成によって禁止されたとしても、今世紀の揺籃期に新しい個人について、その反対の力の姿と影を描いたのはフロイトの栄誉である。言語の支配、それは、約束する前に、自責のディスクールの歴史的成立のなかで、計算機の神託のつばやきをもって命令するのだ。理性のさらに起源的な力が、集合の論理数学的理論における概念の破裂、音素の言語学的理論における意味の統一の破裂によって生まれるように見える。この光のもとではすべての現象学的、さらには実存主義的運動は、自らの動機の支配者であることにもはや確信を持たない哲学の苛立った代償として現れる。またこの哲学を、ウィットゲンシュタインとかハイデッガーのような哲学者が存在と言語の関係について出す諸々の問いとは、人は哲学においてそれらをこの哲学と区別しようとしているにしても、混同してはならない。これらの問いは自らがこの関係に含まれることを知るにより、かくも考え込み、その時間を探すのにかくもゆっくりとしているのだ。

それゆえ、まさに私が言語に認める力のなかに、アンジューは私の主張の意味を見いだそうとするなら、私にロマン主義者たちの後援があるなど言うことはやめるべきだ。つまり、私は自分のシュールレアリストたちとの親交を否定することもないし、彼らのディスクールのマラ風のスタイルを否認することもないが、むしろクヴィル氏が私の援護をしてくれるであろう。そして、このことは少なくとも次のように私が指摘することにおいて言える。つまり、言語は、今日まで自らを隠していた人間的媒介から解放されてひとつの力を示すのだが、この力に比較すると、人間的媒介のアンシアン・レジームが持つ絶対への自負はとるに足らないものであろうということである。

これらの言明が大胆であるように見るとしても、私は自分にたいする反論を、私が期待できる返答がない

- 32 -



のだとは考えないということを示言している。それとはまったく反対に、アンジューにおいて彼の言明は、真理がわれわれを追いつめて始めて得られる、真理とのあの近接性を表明するのである。

それは、ある種の熱狂は、たとえそれが称賛を意味しているのであっても、私にさらなる慎重さを促すほどでさえあるのだ。つまり、私の主張が解放的效果を感じさせることで拍手を送るのはいいだろうが、この感覚の幸福感とともに拍手も消え去るのにちょうどよい速さでそうしてほしいのだ。

技法の優先ということがここで問題になっているのではなく、技法についての教育の虚偽なのだ。問題はそこに奇抜なものをいれることではなく、神秘的なものを除くことである。ところで神秘は特権と結びついており、そこではすべての者が利益を得る。この利益がなければ神秘にそれほどこだわらないのだが、神秘を暴くことはつねにその利益を侵害することとなり、歓迎されないのだ。

曖昧な仕事の輪郭がはっきりすると一息つけるとしても、仕事に関する障害がなくなるわけではない。分析において治癒をもたらすパロールとは皆さんのもの以外ではない、ということをお皆さんに思い起こさせることは皆さんを解放するに違いないだろうが、私は皆さんを言語において皆さんの力ではもっとも扱いにくい支配者に引き渡すのだ。たしかに、自慢をすることをひかえれば認めてもらえるような分野はないし、慎重さや大胆さが多くの場合不意を打たれる分野もない。このことを理解するには、運の再来は弁証法的法則の人間の形態であり、そしてそれゆえパロールを信頼することによって運から逃れることを期待できるわけではない、ということをおこすだけで十分である。

それについて別の結果を得るには、比喩的に言えば、言語を音を扱うように扱わなければならないだろう。つまり音の壁を越えるにはその速さで行かなければならないのだ。そのうえ、真の解釈の衝撃波音を語ることで、主体が現実の<sup>portantis</sup>枠組みを舞台装置の照明のない暗闇から手探りで再び出現させるために解釈が主体を沈める夜の闇において、解釈が主体の防衛に先行しなければならない早さにかなり見合ったイメージを使うことになるだろう。

- 33 -

この効果は得がたいものであるが、それ抜きでも、みなさんはこの言語の壁自体を利用できる。そして、私はこの壁をひとつの比喩とは考えない。なぜなら、それが現実界でひとつの場所を占めていることは私の話の必然的な帰結であるからだ。

みなさん是对話の相手に到達するためにこの壁を利用できるのだが、それには条件がある。この壁を利用するという事は両者ともこの壁の手前にいるのだということ、それゆえ、その彼方に相手を対象化するのではなく、間接的に相手に到達することを目指すべきだということを知っているという条件である。

これは、私が次のように言って示したかったことである。つまり、文明のなかで通常の主体が執着する心理学的信心は、ほとんど普遍的だからといって無害だと考えるべきではない妄想の一変種を構成するといふかぎり、通常の主体は世界中のすべてのパラノイア者との場所を共有するのだということである。パスカルの言う、かくも必然的に見える狂気を持つ狂人でないということ自体、またべつ狂気を持つ狂人だ、といふかぎりにおいてでなければ、たしかに、みなさんがその場所に参加することを許すものは何もない。

このことは、教育法が抵抗分析という名目で飾って、熊使いにダンスを教える熊のようになって、教育法という鉛の靴をはく理由には決してならないだろう。

患者がみなさんに言うことができるのは、みなさんが自分自身患者に答えるのを聞くことによってであることは、教育分析に意味があるとすれば、まったく明白である。反対に、いわゆるコントロールされた分析という不変の奇跡の秘密がそこにある。だが、このことは、ほんのわずかでも、みなさんの個人的分析がみなさんのみなさん自身へのあの疎外を気づかせたということをお前提とするのであり、この疎外はみなさんの分析のなかで問題となる主要な抵抗である。

こうして、みなさんは言語の壁の彼方で、唯一の占められた、または占められるべきであろう場所から、つまりみなさんの場所から、自分の声を聞かせることができるのだ。

- 34 -

そこにはすべてを再考察すべき長い技法的道のりがあり、そしてそれはまずその基本的な諸概念においてである。というのも、混乱はそこで頂点に達しているし、逆転移をめぐるなされる大げさな宣伝は、善意から始まったものであっても、そこに余計な雑音をもたらすだけだからである。

みなさんは、みなさんの内部で誰が語るのかをまったく知らずに、じっさい、どうして自分はだれであるのかをみなさんに尋ねてくる者に返答することができるのであろうか。なぜならそれこそが患者がみなさんに出す問いであって、またそれゆえに、セルジュ・ルクレールがここで患者と共にみなさんにあえてこの問いを出すとき、勇敢にもこの問いを出したことにたいして私が証言するのは、この問いを出すためにすでに彼は自分自身を私の弟子だと宣言しているのであるから、私が彼に負う、この問いに含まれる私から彼への「おまえは私の弟子だ」という返答によってではなく、みなさんの前で私が彼に言うに値する「おまえは分析家だ」という返答によってである。

私はここで自分の返答を制限しなければならない。グラノフがすでにわれわれを巻きこんで、精神分析においてなされる対象関係の使用を非難する点において彼に従うためには - 私は期待するのだが - われわれと一緒に踏破しようとする道を予測しなければならない。そしてこの道はおそらく死の本能の問題をまず通ることを要求するだろう。つまり、ひとが思い上がって軽蔑するところから判断すると、フロイトの思想が切り拓いたもっとも険しい道筋である。私は決してみなさんをここにおける意味の厚みのなかで導こうと思ったことはない。そこでは欲望、生と死、反復強迫、根源的マゾヒズムなどがたいへんみごとに脱物化されており、フロイトはそれらを自分のディスクールで横断している。私は、この道が始まる四つ辻にいつか立ち戻ることを昨夜約束した。

実をいうと、ジュリエット・ブートニエがすばらしい手紙をくれたことで、私は結論においてそれを避けるわけにいかなくなったのだ。彼女は、自分の名前が鏡像段階と結びついているこの私が、想像的なものを悪く扱おうとはしないことをよく知っている。私はイメージを意識の基盤としておくだけではなく、それをあらゆる所

- 35 -

に拡張したいのだ。湖のなかの山の反映は、いわば、宇宙の夢のなかで意識の役割を果たしているのだろうが、宇宙が沈黙から抜け出さない限りそれについてはなにも知ることはできないだろう。ジュリエット・ブートニエが私のディスクールについてする心配は、この心配から来る反論のなかに収められなければそれゆえ不必要なものである。その反論とは、なぜ私は象徴と死の間を等式で結ばなければならないのか、というものである。

今その概念を定義することができないので、イメージでそれを説明するが、フロイトは天才的にもこのイメージをその謎の衝撃的な中心にわれわれを置くためのおとりとして作用させたのである。

フロイトは人間の子供が言語とパロールによって捉えられる瞬間を押さえた。彼と彼の欲望がここにある。紐に結ばれた球を子供は自分の方にひっぱっては投げ、再びつかんでまた投げる。ところが、子供はその把握、再投、そして再把握を、オー、アー、オーと拍子づけ、それについてそばにいる人 - この人がいなければパロールはないのだが - がそれを聞いていたフロイトに、それはフォルト、ダー、行け、来た、また行け・・・ということの意味するのだと言うのは間違いではない。むしろ今では忘れ去られている作家が強調していた言葉に従い、ナピュス<sup>18</sup>と言った方がよいかもしれない。

いずれにせよ、子供が抑揚をつけて言うことの発音がかくも未熟であることは重要ではない。なぜなら、すでにそこには音素的カップルの構成が現れているからである。このカップルにおいて言語学は、それ以後なした大きな一歩によって、要素的対立のグループを認め、そしてこの要素的対立について言えば、四分の一頁の表に表せるほど簡単な一組のものが特定の言語の母音的素材を与えるのである。

シニフィアンが純粋な要素の形態で到来するのを目のあたりにするのはほとんどできすぎたことだとしても、それと同時に生じる意味作用についても同様であろうか。この単純な遊技の前に少なくともどうしてそれを自問しないでいられようか。

じっさい、この子供が行っているのは、この対象を幾度となく消滅させることでなければ、この消滅から自

- 36 -

分の対象をつくり出すことでなければ、何なのであろうか。おそらく、それは自らの欲望が幾度となく蘇るためのものでしかないだろうが、彼の欲望はすでにこの欲望の欲望として蘇るのではないだろうか。母親を待つつらさが象徴的な転移となって現れた、ということを経験や証人によって説明する必要はなにもない。ジュリエット・ブートニエが私のディスクールの中から取りだしてきた、ものの殺害はすでにそこにある。それはすべての在るものに、世界のあらゆる現前が取り去られる不在というあの背景をもたらすのだ。ものの殺害は、これらの現前を無のあの現前である象徴に結びつけ、それによって現在するものから不在が浮かび上がる。そしてこの子は、存在の悲壮なものへと永遠に開かれる。「行ってしまえ！」と、彼は愛する者が戻ってくるために言い、「来て！」と、すでに彼には不在となっている者につぶやかなければならないと感じるのだ。

このように、最も単純な形態においてもシニフィアンはすでに意味すべきあらゆるものにたいして絶対的優位なものとして現れる。それゆえ、ここでわれわれは、その生成が構造を模写するという特権を持つという錯覚を保持することができないのだ。ひとつの言語を構成するためにはいかなる最小のシニフィアンの対立の数が必要であるかという問いが適切ではないのは、最低何人の競技者がいれば主体が誓いの言葉<sup>P a r o l e</sup>を宣言して勝負を始められるかという問いと同様に適切ではない。

なぜなら、他人も欲望もそこではこの象徴化する対象のうちに含まれている幻影たちの中にすでにあるからだ。そして、最初にこの象徴化する対象を捕らえたことによって、最後にそこから出て、ゲームの四番目の沈黙しているものをなす死もそれらとともにあるのだ。ゲーム、それは主体である。だが、それでもやはり、カードを切ることはゲームに先行し、規則は主体とは関係なく決められ、他の者達はカードにいかさまをし、またカードが欠けているかもしれないし、幻影たちの服をまとして勝負をする生者たちは自分たちに都合のよい切札しか宣言せず、そしていかなるゲームをするにせよ、ゲームをしているにすぎないことはわかっているのである。だから、刻一刻鳴り響く「*Alea jacta est*」という言葉は「サイは投げられた」と理解するべきではなく、むしろ私

- 37 -

を世界と結ぶユーモアで次のように言いなおすべきである。「すべては言われている。愛についてのおしゃべりはもう十分だ<sup>19</sup>」。

これが意味するのは、ゲームのなかで人間行動が始めるものは生きてはいないということではもちろんなく、そこで再び生きるということなのだ。このように、人間行動は自らがひとつのフェティッシュとして集めるものの中に凝固し、再び新しい集合のために開かれ、そこでは最初ものは消去されるか同化される。(アンジューはここで自分のカントを見だし、全面的に同意する)。だが、数えられるのは常に最初の四者である。

いずれにせよ、この四者を自分たちの秩序のなかに残さないものは何も起こりえないのであろうか。そういうわけで、私はここを去る前に、ペロツティ氏に、音楽は彼らの踊りについて一言つけ加えることができるだろう、そしてさらに聖なる太鼓<sup>20</sup>は、彼らの法の公布の前触れとなっていた組織的反響を思い起こさせてくれる、ということについて賛意を表したいが、これ以上何を言えばよいのであろう。ただ指摘することがあるとすれば、やはり言葉では表せないことがそこでは起こるということには同意するが、分析は音楽でなされるのではないということである。だが単に言葉では表せないものとして提起されるものにたいして「以後それについて語るのはやめよう」という、批判的になる恐れのある無頓着な態度によって答えるのはこのディスクールの選択でもあるのだ。

だが、分析の手段がパロールに限定されるのは - これは人間的行動として賞賛されるに値する事実だが - それが分析の終結の手段であるからなのだ<sup>21</sup>、ということとを無視するなら、さらに大きな無頓着さを示すことにならないであろうか。

- 38 -

---

\*1 エクリ、Ed. du Seuil, 1966, p.237-322.

\*2 ここでは量的な問題で、ラカン博士の講演はローマでなされた速記タイプから要約された。そこから、編集において部分的な間接話法が使われた。

\*3 訳注：ラテン語の respondeo(保証する)に由来している。

\*4 訳注：「機械仕掛けの神 deus ex machina」窮地に突然現れて助けてくれる神。

\*5 周知のとおり、これはヤスパース氏自身が好んで使う形容である。

\*6 訳注：ルイス・ヴァス・デ・カモンイス、ポルトガルの詩人(1525? ~ 80)

\*7 訳注：フェリーニの同名の映画を示唆しているのであろうか。

\*8 訳注：昔の化学実験のようなものを考えているのであろう。

- 39 -

\*9 訳注：字義どおりに訳すると「神秘化」である。

\*10 訳注：国債を所有している外国人が本国で課税されていることを宣誓供述して免税を請求する宣誓供述書、またはそれに基づいて発行される国債非課税証明書。

\*11 訳注：ラブレアの表現

\*12 ここで私が最近、精神分析を本業とはしない諸専門家のために精神分析を扱った講義の熱心な出席者の一人からうち明けられたすばらしい話を付け加えておきたい - 「あなたから説明していただくことはいつも理解できるわけではありませんが(ご存じの通り私は聴講者に手心を加えることはまずないのだ)、それでも、なぜかわかりませんが、あなたは私が扱う病人の聞き取り方を変えたことに気がつきました」。

\*13 訳注：Maurice Leenhardt(1878-1954)フランス人プロテスタント宣教師で民族学者。

\*14 最近の出来事のコメントをこのディスカールに再び結びつけることを許していただきたい。この指摘に従って、最近までのヨーロッパの外にあった共和国の上品な大使夫人に、彼女が生みの親の遺伝子に、さらには身体的かつ比喩的な意味での**彼女の受けとった糧**に何を負っているか、そしてそれと同じく、あるいはそれ以上に、名前、つまりオルガ・ドゥランチェク、を彼女に与えた戸籍上の特異性に彼女が何を負っているかについて意見をたずねたところ、自由奔放な無邪気さでいきなり「でもそれは偶然です」という言葉が出た。この言葉において、唯物的弁証法の勝利には興味をほとんど示さないこの純真な魂は、スコラ哲学的伝統による実体に対立するものとしての偶有性を再発見する。そしてまた同時に、なんと人間的であることか、**彼女は彼女である**、たしかに「彼女」だ、神の知による世界への輝かしい彼女の出現においておそらくずっと予定されていた彼女だ、という素直な信心にある自分の人格にまったく夢中になっている小市民との共存の真の土台を再発見するのだ。

\*15 訳注：マラルメの『エドガー・ポーの墓』に「部族の言葉により純粋な意味を与える」という一節がある。

- 40 -

\*16Cf. シュレーパー裁判長の症例、in 「五つの症例」GW,VIII, p.299-300.

\*17 訳注：アポロは蜥蜴を殺したことから「サウロクトノス、蜥蜴殺し」とも呼ばれる。

\*18 訳注：Napus、il n'y en a plus(もうない)を略しているのであろう。

\*19" Tout est dit. Assez jacte d'amour"ラテン語の「jacte 投げられた」にフランス語の俗語の「おしゃべりをする jacter」を掛けている。

\*20 これについてわれわれは、マルセル・グリオール[フランスの人類学者]と共に、トランペットと取り違えてはならないあのナケール太鼓のうちにアビシニアの名前を見いだすのである。

\*21 このテキストからはバンジジェル氏のすばらしい発表にたいする返答の部分が抜けているが、その返答を載せたとしても、その意図に適うには加筆が必要であっただろう。その意図とは、分析とあの神秘的領域の関係を定義すること以外のものではないが、この神秘的領域については、分析の場において中心的な位置を占めるように見えるとしても、純粋に方法論的にはそれを分析の場から除外するべきであるように思われる。宗教性の、多かれ少なかれ大洋的なすべての形態にたいするフロイトの追放の徹底した意味も、同じくそこに示されていたのである。

切りとられた部分の不可視性は、このディスクールがその諸部分の間での可能な限り等しい多義性の中で自らを支えるという公然の意図を、確認するのであろうか。